



The Pictet Group - 200 years of history

ピクテ - 200 年の歴史



The Pictet Group - 200 years of history

ピクテ - 200 年の歴史

1805-1841

The beginnings

創設期

Two young bankers, both under 30, joined forces to set up a company to “trade in goods and articles” .

The Restoration period proved to be a favourable one for trading, and the industrial revolution was starting to gain a foothold in Geneva. Paddle steamers were already plying the waters of the lake.



レマン湖の風景
Friedrich Fregevize (フリードリッヒ・フレジヴィーズ、1770-1849) 作

ド・カンドル、マレ・アンド・シー (De Candolle, Mallet & Cie) からド・カンドル、テュレットィーニ・アンド・シー (De Candolle, Turrettini & Cie) へ: ピクテの起源

1805年7月23日、2名の20代の若き銀行家、ジャコブ・ミッシェル・フランソワ・ド・カンドル (Jacob-Michel-François de Candolle) と、ジャック・アンリ・マレ (Jacques-Henry Mallet) は、他3名のリミテッド・パートナーと共に、ジュネーブにてパートナー契約に調印しました。このパートナー制の会社は幾度かの社名変更を経て、現在に至ります。「あらゆる物品の取引、年金掛金の集金、商品投機取引の引受」を目的に資本金125,000ポンド (ポンド: 当時のジュネーブの通貨) で新会社は設立され、その後間もなく資産管理と為替取引業務に専念する銀行となり、サン・ピエール通り3番地 (3, cour Saint-Pierre) にあるド・カンドルの住居にて業務は開始されました。

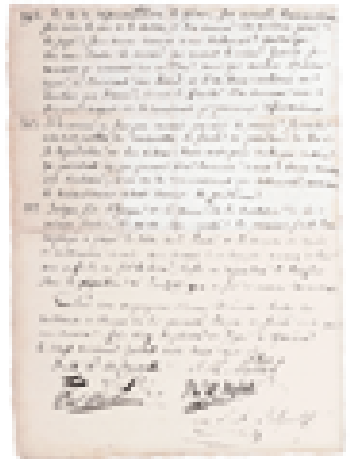
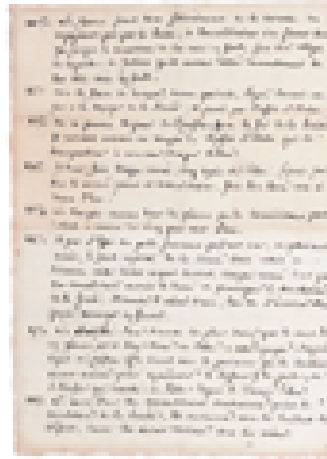
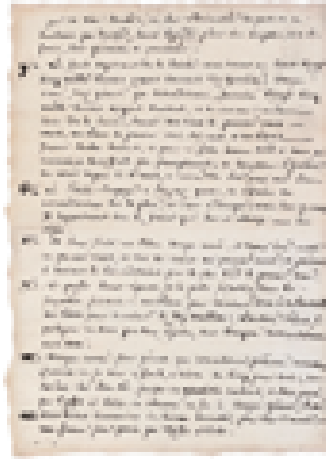
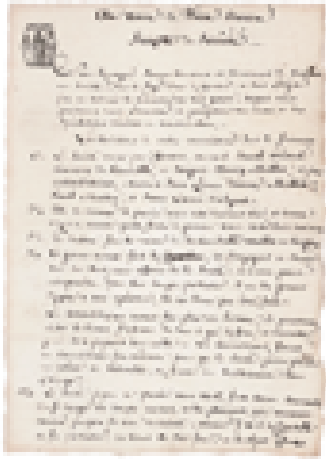
フランス領下のジュネーブでの銀行設立

ジャコブ・ミッシェル・フランソワ・ド・カンドルと、ジャック・アンリ・マレの2名が、後のバンク・ピクテ・アンド・シー・エス・エイ (Banque Pictet and Cie SA) となる大胆なベンチャー事業に着手した当時のジュネーブではまだフランス革命暦が使用されており、銀行の設立日はフランス革命暦13年テルミドール(熱月)5日です。ジュネーブがフランス領となる条約が結ばれたのは、フランス革命暦6年フロリアル(花月)7日(1798年4月26日)のことでしたので、旧ジュネーブ共和国の歴史に密接に関わるこの2名の銀行員は「フランス生まれ」でした。

ピクテの起源となる会社の設立をはじめ、さまざまな民間プロジェクトが立ち上がった。ソフトドリンクのブランド、シュウエップス (Schwepe's) は、ジュネーブで15年に渡ってミネラル炭酸水を製造していたシュヴェッペ氏 (Schwepe) が、イギリスにシュウエップス (Schwepe's) として支店を開設する前の1807年に当局より認可を得たことに始まり、今でも世界各国で販売されている

フランス占領下のジュネーブは新たにレマン地方の行政の中心地となりましたが、それは困難な時代の幕開けでもありました。1785年には85,000個だった時計の生産量は1801年から1803年には30%減の60,000個に減少しています。フランス政権は保護貿易主義の立場をとり、ジュネーブ経済を守るために商工会議所や商品市場、通商・芸術・農業の評議会などを設立しました。

ジャコブ - ミッシェル - フランソワ・ド・カンドル (1778-1841) は著名な植物学者であるオーギュスタン・ピラミュ・ド・カンドル (Augustin Pyramus de Candolle) の兄弟で、プライベート・バンカーであると同時に様々な公職にも就いていました。彼のパートナーであったジャック - アンリ・マレ (1779-1807) は銀行設立のわずか2年後、重要な役割を果たす機会もないまま亡くなりました。その後、彼の兄、ジャン - ルイ - エティエンヌ・マレ (Jean-Louis-Etienne Mallet, 1775-1861) は、ポール・マルティン (Paul Martin, 1766-1837) とジャン - ルイ・ファルケット (Jean-Louis Falquet, 1768-1842) とともにマネージング・パートナーとなりました。1807年、ジャック - アンリ・マレの死後、ジャコブ - ミッシェル - フランソワ・ド・カンドルの友人であるシャルル・テュレットティーニ - ネッカー (Charles Turrettini-Necker, 1782-1857) がパートナーに就任しました。シャルルはマネージング・パートナーとリミテッド・パートナーを兼務し、銀行の名は1807年にド・カンドル、テュレットティーニ・アンド・シー、その後1812年にJ.ド・カンドル・アンド・シー (J. de Candolle & Cie) に、そして1819年には再びド・カンドル、テュレットティーニ・アンド・シーに変更されました。オフィスはシテ通り26番地 (26, rue de la Cité) に移転、1856年まで拠点としています。



125,000 ポンドの株式資本に達した当時の銀行の定款

両替商、金商人、そして資産運用

「両替商」と「金商人」という、それまでのビジネスとは別に、当時のピクテは顧客に代わり商業手形の取引や保管、証券の売買、裁定取引、収益の現金化、証券の償還などを行い、さらには、資本市場において変動ローンの取り扱いを開始します。当時、ジュネーブ証券取引所は存在せず（19 世紀後半に設立）、認可を受けたブローカーが毎日銀行を渡り歩き、取引を執行しました。

ド・カンドル、テュレットィーニ・アンド・シーは早い段階から保険業務にも携わり、1821 年にはパリに拠点を置く生命保険会社（*Compagnie Générale d' assurances sur la vie*）のスイス代理店となりました。

1838 年の顧客記録には、従来の債券と株式に加えて、ウィーンやナポリの宝くじやトンチン年金（アイルランド、トリノ、オルレアン）といった、より独創的な投資が見られます。債券には、フランス国債 2 1/2%、オランダ国債 2 1/2%、パリ市債 4%、ロシア国債 5%などがありました。株式のなかには、ヨーロッパで最初に建設された吊橋の一つであるパキ（Pâquis）の吊橋や船舶のル・アーヴルのジョルジュ（George）やオランダの蒸気船ロッテルダム（Rotterdam）の資金調達のために発行されたものもあります。



ジャコブ・ミッシェル・フランソワ・ド・カンドル。ジャック・アンリ・マレと共同でピクテの起源となる会社を設立



シャルル・テュレットィーニ・ネッカー。1807年にジャコブ・ミッシェル・フランソワ・ド・カンドルのパートナーとなった



ジュネーブのパキ（Pâquis）にある吊橋。ヨーロッパで最初に建設された吊橋の一つ

M.-A. ドゥモール（M.-A. Demole）が共同出資を募った会社により建造されたピンケルリート船の煙柱は、後に物資の輸送に使われるようになる大きな大三角帆船と並んで、湖上の風景の一部となった

ライプツィヒでのナポレオン敗北（1813年10月18～19日）により、スイスはフランス軍から解放されます。フランス帝国は崩壊し、ジュネーブはスイス連邦に加盟するという、かねてからの構想を実現できました。1815年5月19日、チューリッヒ議会で再統合の決議に調印、ジュネーブはスイスの新しい州となりました。

27年続いた王政復古の時代はジュネーブに繁栄をもたらし、時計製造業が回復、1820年の生産個数64,000個から1845年には100,000個に増加しました。

王政復古によりジュネーブにいくつもの新しい組織が現れました。いまだ生々しく残る革命とフランス占領下の軍による検閲の記憶を根絶しようと物理、自然史、歴史、考古学、医学、読書などの組織がこの時期に始まっています。

レマン湖の入り江の岸とローヌ川沿いに新しい埠頭が建設され、産業革命の最初の兆しである外輪蒸気船を目にすることができました。1823年になると、ジュネーブからコペやニヨン、ロールやウシー（ローザンヌ）へ船で湖上の旅ができるようになります。



レマン湖に浮かぶビンケルリート船 - 1823年にM.-A. ドゥモールが共同出資を募った会社が所有した蒸気船

1841-1878

A renewed association: Turrettini, Pictet & Cie

新たな時代：テュレッティーニ、ピクテ・アンド・シー（Turrettini, Pictet & Cie）

The construction of the first railway lines helped to fuel the rapid expansion of the industrial revolution.

The bank became involved, as part of various consortiums, in the promotion and financing of this new mode of transport and, for the first time in its history, it began to take an interest in shipping.



ジュネーブの主要鉄道駅、
コルナヴァン駅。フランスに
向けて出発する汽車のホーム

19世紀に足跡を残す：エドゥアール・ピクテ (Edouard Pictet, 1813-1878)

1841年、ピクテ家の一族が初めて銀行の経営に加わり銀行には「ピクテ (Pictet)」という名が付き現在に至ります。ジャコブ・ミッシェル・フランソワ・ド・カンドルには後継ぎとなる息子がいなかったため、亡くなる少し前に妻の甥であるエドゥアール・ピクテ (1813-1878) に跡継ぎを頼み、エドゥアール・ピクテは 1841 年にパートナーとなります。銀行の名はテュレットティーニ、ピクテ・アンド・シーとなり、その名は 1848 年まで続きます。

エドゥアール・ピクテは 37 年という長きに渡りシャルル・テュレットティーニ (Charles Turrettini)、フランソワ・ジラルド (François Girard)、アルフォンス・テュレットティーニ (Alphonse Turrettini)、そしてパートナーとしての後半近くにはエルネスト・ピクテ (Ernest Pictet)、エミール・ピクテ (Emile Pictet) と共に経営を担います。銀行名は 1848 年から 1856 年はエドゥアール・ピクテ (Edouard Pictet)、その後 1878 年までエドゥアール・ピクテ・アンド・シー (Edouard Pictet & Cie) となり、オフィスは 1856 年にコラトリー通り 8 番地 (8, rue de la Corraterie) へ移転します。

エドゥアール・ピクテは、プライベート・バンカーとしての仕事に加え、ピクテ家の跡を継ぎ、ケス・デパーニュ (Caisse d' Epargne、かつて存在したフランスの大手金融) の役員や、商業裁判所での裁判官を歴任します。30 歳の時に結婚したアメリ・プレヴォ (Amélie Prevost) の父親は、ロンドンの銀行であるモリス・プレヴォ・アンド・カンパニー (Morris Prevost and Co.) で長年パートナーを務めた人物でした。1845 年生まれの一人息子、エミール・ピクテは 1875 年にピクテのパートナーとなり、1909 年に亡くなるまでその職を務めました。彼は父親の意志を受け継ぎ、当時のピクテを実質的に主導していたパートナーであるエルネスト・ピクテを陰で支え続けました。



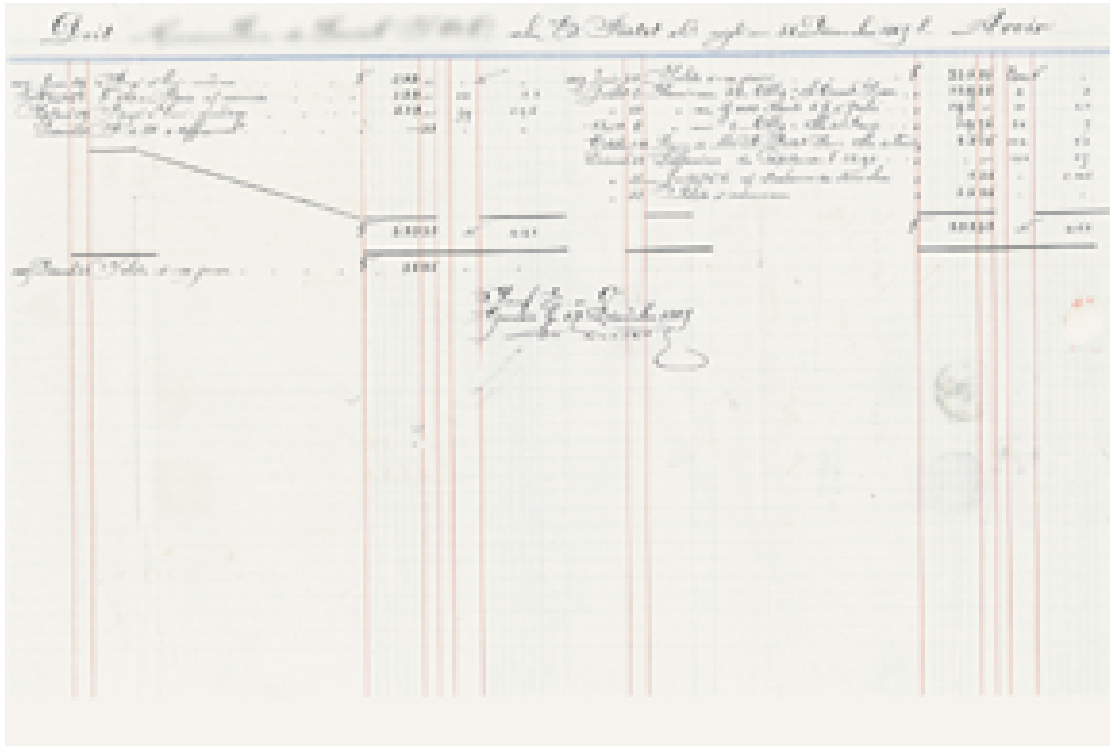
1841年にパートナーとなっ
たエドゥアール・ピクテ

ジュネーブ国務院はジュネーブに新しい鉄道を建設することを可決。当初鉄道建設に関しては「道徳的観点から望ましくない」とされたが最終的には「経済的観点から必要不可欠である」という判断に至る。1845年、フランソワ・バルトロニは他のジュネーブの起業家達と共にこの建設を行う会社の創設を許可された。ピクテ、ヘンチ、フェリエ (Ferrier)、シャポニエール (Chaponnière)、ロンバー、オーディエらが協同創設者として名を連ねた

初めての鉄道建設はヨーロッパの風景を様変わりさせました。イタリアではカヴール (Cavour) 伯爵が2つの鉄道建設を計画、うちひとつがトリノとアレッサンドリアを結ぶ鉄道で、その予算は当時としては大金の3500万スイスフランに上り、ピエモンテの人々はジュネーブのプライベート・バンカーのグループを通して資金を集めることを期待し、「クアトゥール (Quatuor)」という銀行家の企業連合を設立しました。企業連合はヘンチ & シー (Hentsch & Cie)、ロンバー・オーディエ・アンド・シー (Lombard Odier & Cie)、テュレットイーニ、ピクテ・アンド・シー、ルイーズ・ピクテ (Louise Pictet) の4行で構成されていました。このプロジェクトは実を結びませんでした。当時のジュネーブの主要なプライベート・バンカー同士を強い絆で結びつけました。協調の精神の下、共通する事業利益を守るために、ジュネーブのプライベート・バンカーは1872年に金融協会 (Financial Association) を設立しています。続いて1890年にはジュネーブ金融組合 (Financial Union of Geneva) を、その後1933年には今日も存続するジュネーブ・プライベート・バンカーズ協会 (Geneva Private Bankers' Association) を設立しました。

スイス鉄道から北米債券まで

1850年から1870年にかけて、ピクテは顧客にスイス、ヨーロッパ、そして北米の有価証券投資の機会を提供、幅広い企業の債券や株式を推奨しています。その中にはスイス鉄道会社 (*Société générale des chemins de fer suisses*)、フランス - スイス鉄道会社 (*Compagnie franco-suisse des chemins de fer*)、フランス再保険会社 (*Compagnie française de réassurance*)、ローザンヌの保険会社 (*La Suisse*)、



エドゥアール・ピクテ・
アンド・シーの勘定明
細（1867年）

シレジアの垂鉛鉱山、サンゴバン・ガラス工場（Saint-Gobain Glassworks）、そして、アメリカの鉄道（オハイオ - ミシシッピ、オハイオ - ペンシルベニア等）の資金調達ために発行された債券もあります。

1857年、ピクテは海運業にも関心を示し、パートナー達と何名かの個人出資者と共にフォルモザ（Formosa）というトウモロコシや石炭といった物品を運ぶ商業船の所有権の過半数を取得します。

スイス初の鉄道建設は1844年ですが、ジュネーブは鉄道網開発に若干手間取り、1858年3月16日になりようやくリヨンとジュネーブ間が開通、その後ヴェルソワやセリニーにまで延長されモルジュ - イヴェルドン線に繋がりました。ジュネーブ - リヨン線の建設はパリ在住のジュネーブの銀行家フランソワ・バルトロニ（François Bartholoni）によるもので、ちなみにこの人物はジュネーブ音楽院も建設しました。

1878-1909

An age of liberalism

リベラリズムの時代

The end of the 19th century proved to be a prosperous period for Geneva, which benefited from considerable political stability.

Ernest Pictet was favourably disposed towards Anglo-Saxon liberalism, and his ideas injected fresh life into the Bank, which, at the time, comprised a dozen or so staff members.



1906年、社員に囲まれたエルネスト・ピクテ（前列左から4番目）とギヨーム・ピクテ（同2番目）

エルネスト・ピクテ・アンド・シー（Ernest Pictet & Cie）：無限のコミットメント

銀行の創設者の一人であるジャコブ - ミッシェル - フランソワ・ド・カンドルの孫息子、エルネスト・ピクテ（1829-1909）はリバプールで綿輸入事業に数年従事した後、1856年にパートナーとなり、エドゥアール、エミール、ギヨーム・ピクテ（Guillaume Pictet）と共に53年以上に渡りその職務を遂行しています。

エルネスト・ピクテは鋭いビジネス感覚の持ち主で銀行に新しい風を吹き込みました。彼はアングロ・サクソン流リベラリズムの熱心な提唱者であり、この経済原理をもって銀行の新しい事業を推進していきます。

当時スイスで紙幣発行を許可された18の銀行のひとつである商業銀行（*Banque de Commerce*）の頭取を長年務めていたエルネスト・ピクテは、スイスの金融取引を円滑に進めるため、民間会社の監督下における紙幣の中央発行機関の設立を提案、1863年発行の「*Des banques de circulation en Suisse*」という冊子の中でもこの考えを述べています。提案のすべては実現されなかったものの、この結果、公共セクターと民間セクターの共同体として1905年にスイス国立銀行（*Swiss National Bank*）が設立されています。

エルネスト・ピクテは長いキャリアの中でさまざまな公職を歴任、1865年にはジュネーブ商工会議所を創立し、初代会頭に就任しています。この商工会議所は英国流の政府の干渉が一切ない組織でした。スイスの貿易および産業を監督する協会の会長や、スイス連邦政府の国民審議官なども務めています。1880年、12名ほどの従業員をかかえていたエルネスト・ピクテ・アンド・シーは、プチット通り12番地（12, rue Petitot）に拠点を移し、1909年までその地にとどまります。



著名な科学者であった
ラウル・ピクテ
(Raoul Pictet,
1846-1929)

1896年にジュネーブで開催されたスイス博覧会で、ラウル・ピクテの「-183°Cで酸素が液状化する」との研究発表が注目される。これはジュネーブが実験物理学の世界的研究所として卓越していることを印象付けるとともに、この研究成果は後の冷蔵庫の発明に繋がった

産業革命はジュネーブにも到来

19世紀後半のジュネーブは宗教の違いによる対立の直後でしたが、政治的には非常に安定した時代となり、その恩恵を受けたジュネーブは著しい経済発展を遂げています。城壁は不要となり、ジュネーブは「開かれた」街として地域レベルで真の産業革命が到来しました。科学者とビジネスマンの相乗効果で、ピクテもその発展に貢献しています。フランスの銀行、ユニオン・ジェネラル (*Union Générale*) の倒産はジュネーブ証券取引所も影響を受け、回復までに何年もかかりました。しかしそれでも、ジュネーブの経済発展への努力は目を見張るものでした。オギュストゥ・ドゥ・ラ・リブ (Auguste de la Rive) と マルク・チュリー (Marc Thury) が、後に高精度測量機器の生産で有名になった測量機器協会 (Society of Physical Instruments) を設立した頃、精密工学が発展し始め、1880年以降さまざまな機械工業製品が誕生しています。後のアトリエ・ドゥ・セシュロン (*Ateliers de Sécheron*) と なるドゥ・ムロン・アンド・クエノ (*De Meuron & Cuénod*) は電気機器製造のパイオニアでもあります。

19世紀の終わり、ジュネーブは産業ブームの渦中にありました。第一次産業の労働人口が全体のわずか9%であった一方、第二次産業は42%、第三次産業は50%でした。その数年前に決定された多額のコストを掛けた産業化計画でジュネーブは多額の借金を背負い、ジュネーブ産業サービス (*Services industriels de Genève*) の設立がジュネーブ州経済に大きな負担となります。しかし、ギユスターヴ・アードル



19 世紀末、ジュネーブは世界に開放された都市となり、産業革命の渦中にいた

(Gustave Ador) 率いる民主党による新政府のもと、19 世紀末にはジュネーブ経済は再び黒字に転換、新しい世紀にやってくる様々なチャレンジへの準備が整っていったのです。

1909-1939

Good times and bad times

好景気と不景気

While Geneva was undergoing major industrial development, the Bank was forging important links with the USA and South America. However, the 1929 crash put an end to the guarantee of years of prosperity, and social tensions started to divide the people of Geneva. By this time, the Bank's staff had risen to around 60 people.



ディデイ通り 10 番地
にあった当時の銀行の
メイン・エントランス・
ホール

ギヨーム ピクテ・アンド・シー (Guillaume Pictet & Cie) から ピクテ・アンド・シー (Pictet & Cie) へ

エルネスト・ピクテの次男であるギヨーム・ピクテ (1860-1926) は文学と科学の両分野を修めた優秀な学生でしたが、家業を継ぐ道を選び銀行家となります。しかし最新の科学的発見への情熱は忘れず、電気とフォトグラフィーの発展に強い関心を持ち続けました。

1889 年、29 歳で父親のもとでピクテのパートナーとなったギヨームは 1909 年に父親が亡くなった後、社名をギヨーム ピクテ・アンド・シーに変更、同年ディデイ通り 10 番地 (10, rue Diday) にオフィスを移転しました。

彼のキャリアが終盤に差し掛かる頃、ピクテはおよそ 60 名の従業員を抱え、当時としては規模の大きなプライベート・バンクに成長しています。ギヨーム・ピクテは著しく進展する産業高度化時代の中で事業を大きく発展させました。

国際舞台に翼を拡げた銀行

ギヨーム・ピクテはスイスの銀行家が米国や南米に幅広いネットワークを築くことの重要性をいち早く認識し、1895 年にニューヨーク、サンフランシスコ、そしてロサンゼルスを訪れ、1905 年に再びアメリカとメキシコを訪れています。

ギヨームは運用に慎重な顧客が米国への投資で選好するのは鉄道会社発行の社債ばかりであることに気づき、分散投資の観点から電力会社の株式を提案します。1910 年にはアメリカの電力会社に投資する金融会社 (*Société Financière*) を設立、初代会長に就任しました。その後、ニューヨークに本部を移し、ポートフォリオの大半を電力関連企業に投資する会社である「アメ



ギヨーム・ピクテ。大西洋の対岸にビジネスネットワークを構築

リカン・ヨーロッパ証券会社 (American European Securities Company) となります。

メキシコから帰国したギヨームは、フランスからの移民家族が設立したメキシコ企業の株式を提案しました。ブラッスリー・モクテスマ (*Brasserie Moctezuma*) やサン・ラファエル (*San Rafael*) 製紙会社、オリザバ事業会社 (*Industrial Company of Orizaba*)、タバコ会社のエル・ブエン・トノ (*El Buen Tono*)、そして生地製作会社のサン・イルデフォンソ (*San Ildefonso*) といった企業です。ギヨームは、メキシコ産業金融会社 (*Société Financière pour l' Industrie au Mexique*) に関心を示しました。この会社はパリ・オランダ銀行 (*Banque de Paris et des Pays-Bas*) の支援の下に1900年に設立され、後にソパフィン金融産業投資会社 (*Société de participations financières et industrielles Sopafin*) となりました。1942年、メキシコ株は売却しています。この会社とピクテは2002年まで密接なつながりがありました。

2017年まで「アメリロセック (*Amerosec*)」の名で存在した「アメリカン・ヨーロッパ証券会社」と「メキシコ産業金融会社」は投資信託のパイオニアと言えるでしょう。

ギヨーム・ピクテは当然のことながらブラウン・ボベリ (*Brown-Boveri*)、フランコ・スイス金融会社 (*Société Financière Franco-Suisse*) やジュネーブ・ガス工業会社 (*Compagnie Genevoise de l' Industrie du Gaz*) といった、スイス企業の発展にも関心を持ち、また、スイス国立銀行とスイス銀行協会の理事も務めました。ロンドンやニューヨークで育んだ有益な人脈を活用し、1915年から1920年にかけてピクテ銀行を通じて、スイス連邦への3件の大型ドル建て融資交渉を委託されています。



2017年まで Amerosec
の名で存在した「アメ
リカン・ヨーロピアン
証券会社」の証券証書

彼の輝かしいキャリアが終盤に近づく頃でも、様々な方面から要職への要請は多く、彼自身も公務に時間と労力を注ぐだけの活力に満ちていました。1924年にはジュネーブ州議員に選出、景気が良いとは決して言えなかった当時のジュネーブ州の財務長官という大役を引き受けます。しかし政治闘争と病により、16ヵ月後にこの世を去ることになります。

ギヨーム・ピクテは、エルネスト、エミール、エイモン・ピクテ (Amon Pictet) の他、ジャック・マリオン (Jaques Marion)、ギュスターヴ・デュナン (Gustave Dunant)、シャルル・ゴージェ (Charles Gautier) とともにパートナーシップを結び経営を行いました。1909年に父親が亡くなってからも単独で銀行を統率することは考えておらず、ギヨーム・ピクテはジャック・マリオン (1856-1930) を彼のパートナーとして代理人に指名しました。ジャックは16歳の時に実習生として入行、その後58年に及ぶピクテでの就労の間、4世代のパートナーとともに業務を行いました。

1914年、ロンドンに拠点を置く銀行モリス・プレヴォ・アンド・カンパニーからギュスターヴ・デュナン (1880-1933) を迎えました。ギュスターヴはピクテの英国との取引関係の発展に大きな役割を果たします。ギヨーム・ピクテの死後数年、ギュスターヴがシニア・パートナー職を担いました。



「Pic・Pic」の愛称で知られるピカル・ピクテ車。今日では世界に数台しか残っていない

「アトリエ・デ・シャルミーユ (Ateliers des Charmilles)」の前身であった「アトリエ・ピカル、ピクテ・アンド・シー (Ateliers Piccard, Pictet & Cie)」は当初、水タービンを製造していたが、後に自動車、「ピク・ピク (Pic-Pic)」を製造。この会社の功績により、20世紀初頭、スイスは産業の中心地としての評価を得た

「ピクテ・アンド・シー (Pictet & Cie)」の誕生

1926年に銀行名はピクテ・アンド・シー (Pictet & Cie) となり、オフィスをディデイ通り 6 番地 (6, rue Diday) に移転しました。1920年代の激しく変化する景気の荒波の中、従業員 60 名ほどの中規模プライベート・バンクであったピクテは、その後半世紀の間で 20 名のパートナーに率いられ、創立 175 周年にあたる 1980 年には社員数 300 名を抱えるまでになりました。

ギヨームの長男であるエイモン・ピクテ (1886-1928) が跡を継ぎ、米国、メキシコでの就業経験を経て 1910 年にピクテ銀行のシニア・エグゼクティブに、1919 年にはパートナーとなりました。彼の父親がジュネーブの国務院 (Conseil d'Etat) に推薦されたとき、エイモン自身も一連の政治活動を行っています。エイモンは、ギヨームがジュネーブ州経済再建のために提唱した緊縮政策を支持する政党、経済防衛党 (Union de défense économique) の役員会で副会長を務め、またバーゼルのスイス国立保険会社 (Compagnie d'assurance nationale suisse) 等複数の企業の取締役も務めていましたが、1928 年に 42 歳で急死、エイモンの従兄弟のアルベール・ピクテ (Albert Pictet) が跡を継ぐこととなりました。



国際連合の前身である
国際連盟の礎石を設置

1864年の赤十字設立以来、ジュネーブは人道的な役割を担っていましたが、第一次世界大戦終了後は国際都市としての地位を高めていきます。1920年11月15日に初の国際連盟の総会が「改革堂（Salle de la Réformation）」で開催され、また、国際労働機関（ILO）が数ある国際機関の中で初めてジュネーブに本部を置きました。1932年から1934年にかけての軍縮会議をはじめ、ジュネーブは数々の国際会議の主催都市となっていきます。

暗黒の時代：1929年の株式市場暴落とジュネーブ銀行（*Banque de Genève*）の倒産

ジュネーブの国際都市としての第一歩は、第一次世界大戦終戦直後の壊滅的状况と無縁ではありませんでした。ジュネーブ州政府は赤字を漸減させる緊縮政策を打ち出す前に借入金を増やしていました。ジュネーブ州政府と左派寄りの政党である経済防衛党のメンバーであったギヨーム・ピクテは、1924年に860万フラン以上あった財政赤字を、1927年には100万フラン以下に削減することに成功しました。しかし、この称賛すべき彼の実績は、世界経済を大恐慌に陥らせた1929年のウォール街での株価大暴落によって著しく妨げられることになります。1931年にはジュネーブもその影響を受け、時計製造業、機械工場やホテル産業等の従来からの顧客が次第に減っていききました。



フェルディナン・ド・ソシュール。近代言語学の創始者となったスイスの言語学者。ド・ソシュール家から複数名がピクテのパートナーに就任

この「政治的情熱の時代」と呼ばれる時代は失業と社会的緊張を生み、ジュネーブではレオン・ニコル（Léon Nicole）が率いる社会主義政権が3年間に渡って敷かれました。政治的そして経済的なシンボルであったジュネーブ銀行は、多くのスキャンダルにまみれながら、1931年7月11日に倒産します。

経済的困難、政治的混乱のなかでも、ジュネーブは豊かで文化的な環境を守り続けます。エドゥアール・クラパルデ（Edouard Claparède）は、1912年に心理学と未来科学の教育機関であるルソー研究所（*Institut Rousseau*）を創設しました。翌年、近代言語学の父と呼ばれたフェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）が亡くなりましたが、彼の一般言語学講義（*Cours de Linguistique Générale*）は言語学の基本概念を定義しています。例えば、言語は思想を表現するための記号の体系であり、言語の抽象的な体系を指している言語（*langue*）と、「言語を話すという行動に移す」発話（*parole*）の違いです。この概念は人間科学の他の分野にも影響を与えました。ド・ソシュール家の幾人かがピクテのパートナーに就任しています。



1926年、本社をディデイ通り6番地に移転

1939-1950

Crisis and diversification

危機と多様化

To offset the consequences of the Second World War, the Bank began to diversify its activities, in particular by investing in real estate and commodities. From 1950 onwards, wealth management started to enjoy a revival.



戦後のジュネーブの風景

1920年から1950年にかけては、プライベート・バンカーにとって厳しい時代でした。経済危機に端を発した政治危機が繰り返され、ビジネスは落ち込み利益も減少しました。第二次世界大戦中、国外に投資された資金は封鎖され、多くの顧客との連絡が途絶えました。

この困難な状況を克服し、シャルル・ゴージェ、ピエール・ロンバール (Pierre Lombard)、アルベール・ピクテ、アレクサンドル・ファン・ベルヘム (Alexandre van Berchem) そしてフランソワ・ド・カンドル (François de Candolle) がピクテを守り抜きました。

アルベール・ピクテの義理の兄弟であるシャルル・ゴージェ (1886-1974) は1919年にパートナーとなります。大恐慌の時代にシニア・パートナーという重責を担うだけでなく、証券取引所およびジュネーブ・プライベート・バンカーズ協会の会長の職責も担いました。シャルル・ゴージェは社会問題に特に敏感で、プライベート・バンク界で雇用主と被雇用主が折半で拠出金を負担する年金基金を設立した先駆者の一人です。また、手頃な価格の宿泊施設の建設も奨励していました。

エイモン・ピクテが亡くなる直前、1927年にピエール・ロンバール (1886-1977) がパートナーに選任されます。彼はまず、明解さと効率性を重視し、長年にわたる不況がもたらした顧客の資産やビジネスの悲惨な状況に立ち向かいます。戦後の景気回復期、彼が有能なビジネスマンであり、また、極めて優れた運用者であることが証明されます。ピエールはピクテの資産運用の象徴でもあったソパフィン (Sopafin) を何年もの間、統括しました。

弁護士としての教育を受けたアルベール・ピクテ（1890-1969）は、1928年から1955年までピクテのパートナーを務めます。彼もまた、そのキャリアの当初に大恐慌を経験しました。1942年にはスイス連邦全州議会の議員に選出され5年間務めました。

新しい業務

恐慌の影響を相殺すべくパートナー達はピクテの業務を多様化、不動産投資や建設、小規模ローン、石油および海運業などに進出しました。ギヨーム・ピクテの義理の息子であり1937年から1942年までピクテのパートナーを務めたフランソワ・ド・カンドル（1903-1942）主導のもと、ピクテはジュネーブの不動産投資会社（Rente Immobilière Genevoise）を継承し、この会社を安定させ、経済混乱の時代の最中にもかかわらず投資先として安全性の高いものとししました。土木工学を修めたフランソワ・ド・カンドルは、かつての学友とともにコンラード・チョッケ（Conrad Zschokke）という土木会社の経営を引き継ぎます。加えて、ピクテは小規模ローンを専門としたオルカ（Orca）という会社を設立し、アントワープにある石油精製所の建設にも参加しました。また、3隻の貨物船と4隻の商業客船を運営する海運会社のオーナーとなりましたが、これら様々な事業は戦後には中断されました。



戦後、ピクテは事業を多角化、
アヌンシアード
(Anunciada) を含む数隻の
船舶を所有する海運会社を買
収

アレクサンドル・ファン・ベルヘム (1900-1977) の 1930 年から 1965 年に渡るキャリアは、危機的時代と驚異的な戦後復興の時代という 2 つの対照的な時代にまたがっていました。1940 年 6 月に、彼はピクテのアメリカでの利権を守るべく 2 年間家族とともにアメリカに渡ります。精密測定機器製造会社 (*Société genevoise des instruments de physique*) の経営委員会の一員となり、チョックケ (Zschokke) の取締役であったフランソワ・ド・カンドルの跡を継ぎ、1950 年から 1969 年まで会長を務めます。アレクサンドルは、石油、採鉱、海運や農業関連のビジネスにも興味を示す一方で、スイス国外でのオフィス開設など、ピクテの国際展開を初めて提唱した一人でした。

第二次世界大戦後、自由貿易協定と世界的な対話を背景とした国際交流の発展は、商業と銀行業務の飛躍的な拡大を後押しすることになります。

国際都市としてのジュネーブの位置づけはますます強固なものとなりました。国際連合の本部としてニューヨークが早々に選ばれましたが、一方でヨーロッパ本部の決定には議論が繰り広げられ、パリ、ブリュッセル、そしてウィーンなどいくつかの都市も候補に挙がりましたが、ジュネーブにある国際連盟の存在がその決定に有利に働きます。国際連合の本部をジュネーブに置くことは、政治的影響とは別に、経済的にも大きな影響を及ぼしました。建設業は絶頂期を迎え、通信網の開発も進み、銀行セクターにおいても持続的な成長がもたらされました。

1950-1980

The post-war boom

戦後の好景気

By launching a series of new activities, the Bank was able to reap the benefits of the remarkable economic development seen during the thirty-year boom period after World War II.

Computers were to change banking practices considerably, and the burgeoning globalisation of markets meant that Pictet & Cie's 300 employees needed to show an even more acute sense of judgement.



ピクテの新社屋を建設する前の
ジョルジュ・ファヴオン大通り

多様化と大規模な拡張

20 世紀後半、スイスはバンキング・センターとして大いなる発展を見せましたが、特にプライベート・バンカーは目覚ましい発展を遂げます。

専門的職業としてのプライベート・バンキングは、金融技術と事務処理プロセスの両方の観点で、より国際的で洗練されたものとなり多様性を見せ始めます。とりわけ法律の一層の複雑化にも関わらず、プライベート・バンクは発展し続けました。

第二次世界大戦終戦までのピクテの顧客層は、主にスイスとヨーロッパの個人顧客でしたが、その後、世界中へと広がっていきます。デイデイ通りのオフィスは次第に手狭になり、パートナー・コミッティーでは、ジョルジュ・ファヴオン（Georges-Favon）大通りに新しいビルを建設し、すべての業務を1カ所に集中させることが決定されました。建設開始から3年半後の1975年に移転した新オフィスはクラシックな外観と近代的なインフラを融合させた建物でした。

1950 年代初頭になると年金基金やその他の機関投資家向けファンドなどが、次第に重要な地位を占めていく新たな顧客層に注目され、またウェルス・マネジメントの分野も再び注目され始めます。1960 年代にピクテは機関投資家向けサービスの提供を行ったスイス初のプライベート・バンクのひとつとなりました。

1945年には70名だった社員も、1980年には約300名に増え、ピクテはこの35年間に急成長しています。これはスイスの安定した政治・金融や、世界の経済成長の恩恵を受けた結果でもあり、顧客の最大の利益のために全力を尽くす、結束の強い、管理の行き届いたチームの努力もありました。さらに、パートナー達はスイス全域の公共機関同様、ジュネーブに拠点を置く公共機関とも特別な関係を築いており、公職を兼務する者もいました。アルベール・ピクテは1942年から1947年に、ヴィクトル・ゴーティエ (Victor Gautier) は1955年から1963年に、それぞれジュネーブの代表としてスイス連邦全州議会の議員を務めています。



1955年、150周年を迎えた
ピクテ・アンド・シーの社員
は140名以上に

大手プライベート・バンクの誕生

戦争が過去のものとなりつつあるなか、ピクテは急成長を見せ始めます。20世紀後半の経済成長に伴い、様々な新規事業に取り組みました。

1960年代初頭は、まだ個人顧客の資産管理が主要業務でしたが、部員は3名のアシスタント・バイス・プレジデントと、1名のオフィサーのみで、顧客と会いポートフォリオを管理するのは主にパートナー達が行っていました。売買注文はまだ手書きで、メッセンジャーによって証券取引所の取引デスクに送られていました。ビジネスがさらに拡大すると、4名のアセット・マネージャーが任命されます。プライベート・バンキング分野に入る前には他の分野で実績を残してしたこの4名は、それぞれ約20年間忠誠心を持ちピクテに勤務しました。1950年代以降の目覚ましい経済成長は、プライベート・バンキング分野に前例のない発展をもたらすこととなり、大幅に増えた業務量に対応するために、パートナーはアセット・マネージャーのグループを作ることになりました。

当時の銀行の主要事業であったプライベート・バンキング以外に、機関投資家向け資産運用をはじめ、さまざまな事業が成長していきます。1967年にはピクテの従業員向け企業年金基金 (FIPPER) が設立されました。その後10年は、4名のみの機関投資家部門でしたが、この基金の開発とマーケティングに努めるとともに、ピクテが年金基金の管理を任されていたスイス及び国外の機関投資家の対応も行いました。創設された「機関投資家向け資産運用」部門は、後にピクテ・アセット・マネジメント (PAM) に改名され現在に至ります。年金給付と社会保障の分野は1980年代に大きく発達したのです。

1970年のピクテ・アンド・シーのパートナー：ギイ・ドゥモール (Guy Demole)、ドニ・ド・マリニャック (Denis de Marignac)、クロード・ド・ソシュール (Claude de Saussure)、ミッシェル・ピクテ (Michel Pictet)、ジャン・ピエール・ドゥモール (Jean-Pierre Demole)、エドゥアール・ピクテ (Edouard Pictet)、ジャン・ジャック・ゴージェ (Jean-Jacques Gautier)、ピエール・ピクテ (Pierre Pictet)



市場の発展に伴ったもう一つの革新はグローバル・カストディ業務でした。1970年代、機関投資家の資産運用のグローバル化と有価証券管理のIT化、そして銀行ではないために証券保管業務ができない資産運用会社の増加に伴いグローバル・カストディ業務が生まれました。

ピクテはカストディ業務において、1970年代にいくつかの独立系資産運用会社と契約を締結しています。

市場のグローバル化

20世紀後半、金融市場のグローバル化とそれに伴い発展した事業に対応すべくピクテは欧州大陸以外にもオフィスを開設します。まずは調査のために、モロッコのタンジールに、そして次にウルグアイのモンテビデオにオフィスを開設しました。

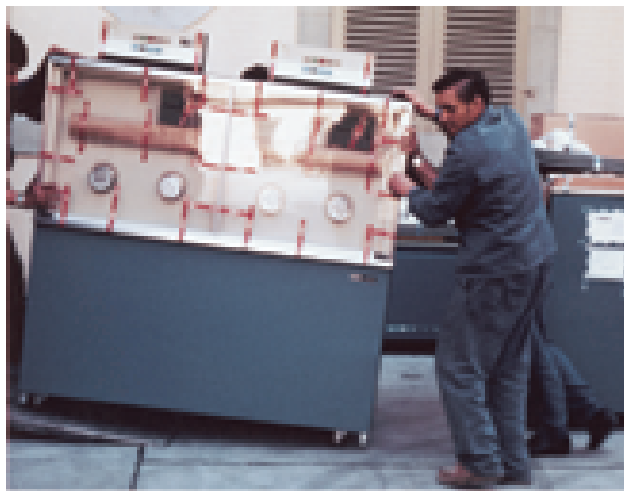


ピクテにどのような変化が訪れようとも、パートナーのロールトップ机は世代を超えて受け継がれている

冷戦の渦中にあった 1970 年代半ばには、欧州での大きな危機発生時に顧客の資産を守るためピクテは北米大陸に拠点を探し始めます。当時モントリオールは優れた通信ネットワークと恵まれた立地条件から、北米大陸における初のオフィスを開くには理想的な場所であると考え、1974 年 6 月 5 日にピクテ・モントリオール (Pictet Montreal) は開設されました。冷戦の終盤にはピクテ・モントリオールは資産運用業務に主軸を移し、ピクテ・グループ全体に米国およびカナダでの証券売買サービスを提供できるようになりました。1974 年にボストン証券取引所、1984 年にはモントリオール証券取引所の会員となりました。また、2000 年からは NASDAQ に直接アクセスできるようになっています。

1978 年、ピクテはバハマ諸島にオフィスを開設しました。バハマ諸島での業務はバハマ諸島に住む多くの国際的な顧客層、そして、中南米 (ベネズエラ、コロンビア、ペルー、エクアドル) およびカナダ在住の顧客へのサービスも開始します。1995 年にバハマで創設した「ピクテ・オーバーシーズ・トラスト (Pictet Overseas Trust)」は、後にピクテ・グループの主要な信託会社となりました。

ピクテは欧州やアジアなどでもグローバルに拡大、2018 年には世界各地に 27 のオフィスを構えています。



ピクテ・アンド・シーに
初めてのコンピューター
が搬入される

1968年、ピクテで最初のITシステムが導入。それは、IBM 360/20 メインフレームシステムを基盤とした。2003年に導入した新しいITプラットフォーム、アバロクは288ギガバイト(2,880億バイト)のメモリを持ち、毎秒約80億もの指示を処理が可能。これは、仮に1968年のシステムで同じ処理能力を持たせようとする、144万台のコンピューターが必要となる

情報技術への取組み

1960年代後半からピクテは情報技術(IT)を導入しています。以降大規模な発展を経て、現在も技術の性能を高め続けています。“リアルタイム銀行”というコンセプトのもと、業務遂行の方法に真の革命がもたらされ、何度も同じことを繰り返さなければならなかった事務作業からスタッフは解放され、日々行う業務の処理スピードも格段に上昇しました。

初めて導入したITシステムは、1秒に2万個の指示を処理することができ、16,000バイトのメモリを持ち、磁気ディスクに5,000万バイトのストレージ容量があるメインフレーム・コンピュータをベースにしたものでした。データ入力にはパンチカードが用いられ、処理結果はハードコピーで印刷されました(助言内容、種々のリスト、残高明細、バリユエーション等)。

最初にITの世界に足を踏み入れてから、様々な技術を取り入れてきましたが、2002年にUnityプロジェクトを立ち上げ、ピクテ・グループ全体のバンキング・システムの技術的また機能的な基本設計概念を根本的に再定義しました。



ピクテは早い段階で IT の卓越した可能性を認識し、その開発にかなりの経営資源を投入した

1980-2005

A private bank in a changing universe

変わりゆく世界の中でのプライベート・バンク

The last 20 years of the millennium went hand in hand with impressive growth within the Pictet group.

The staff headcount soared from 300 in 1980 to over 2000 in 2005, in particular as a result of the development of institutional asset management and of investment funds.



事業開拓、拡大、そして専門化：21 世紀のプライベート・バンク

1980 年から 2005 年の間、ピクテは高まり続ける個人投資家および機関投資家からの要望に常に応えてきました。市場と顧客のグローバル化を背景に、ピクテは、資産残高とともに増加する顧客へのサービスの提供のみにとどまらず、新しい投資手法や最新の運用技術を開発してきました。グローバルな視点による資産保全のアプローチをさらに発展させることが求められていたのです。

ピクテの事業はスイス国内外で拡大、それに伴い運用管理や本部機能も拡大していきました。社員数は増加し、1980 年には 300 名に満たなかった社員数は 2005 年には 2000 名を超えました。

2 世紀に渡って高い信用力と堅実性を確かなものとする精神と伝統を維持し、顧客や市場からの要望を予期し、難題を乗り越え、ピクテは国際水準のプライベート・バンクとなりました。

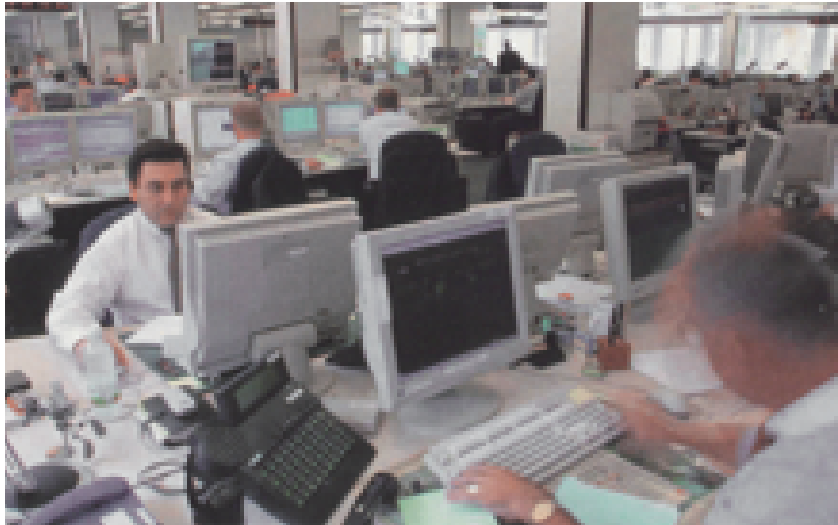
シニア・マネージャー達に囲まれる、パートナー、ピエール・ラルディ (Pierre Lardy、左から 3 番目) と、ドニ・ド・マリニャック (右から 3 番目)。彼らを注意深く見つめる後のシニア・パートナー、イヴァン・ピクテ (Ivan Pictet、右端)

年金給付の発展

1980年代以降、先進国では年金給付の分野が大きな発展をみせます。年金基金の積立金が大幅に増加する中で、ピクテはスイス国内外の機関投資家の期待に応えていきました。

1980年、ピクテはピッツバーグのメロン銀行と共に、ロンドンに機関投資家向け資産運用の合併会社を創設しました（これは後にピクテが経営権を引き継ぎました）。1986年には東京で投資顧問会社を設立しました。スイス国外の機関投資家向けマーケティング業務は、モントリオール、フランクフルト、ミラノ、パリ、東京、シンガポールなどの各オフィスを通じて行われています。

1983年から1986年にかけてピクテの機関投資家向け資産運用部門は、スイス連邦や州、スイス包装協会(SSR)やミグロス(Migros)といったスイスの主な機関・企業向けに私募投信を立ち上げるとともにチューリッヒ市、ネスレ(スイス)とABB(スイス)の年金基金のグローバル・カストディ業務も受託しています。また、投資家がパフォーマンスを比較できるよういくつかの指数の作成といった、革新的な取り組みも行っています。1999年、ピクテの機関投資家向けのすべての業務は、「ピクテ・アセット・マネジメント(PAM)」部門に統合されました。2005年時点では、200人を越える幅広い専門家が年金基金や保険の一般勘定、公募投信や投資ファンドを通じておよそ700億スイスフランの資産を運用しています。



ピクテに託された資産総額は
1960年から2000年の間で
50倍に

成長の成果

1960年から2000年にかけて、プライベート・バンキング部門は大きな発展をみせ、ピクテの預り資産総額はこの時期に50倍に増えています。この目覚ましい成長の理由は、法律がますます複雑化する環境下において、個人または機関投資家の利益のためにこれまで以上に洗練された運用技術をもち、新しいものを取り入れようとする意欲の結果といえるでしょう。

1960年代の始めには事実上、無に等しかった投資信託でしたが、後にはクライアント・ポートフォリオの大きな割合を占め、保有資産を代表するものとなりました。

1991年に新興国ファンドを立ち上げたピクテは新興国投資のパイオニアであり、東欧市場に投資するファンドもいくつか設定されました。1996年に法律改正により、投信ビジネスを発展させる絶好の機会が訪れ、ピクテはピクテ・ファンド・マネジメント・エス・エイ (Pictet Fund Management SA) を設立することを決定します。それは、ピクテ・グループの資産運用力を投資信託という形で国内外へ販売するためのプラットフォームの役割を果たしました。

2005年、総額350億スイスフラン相当の80本以上ものマネー・マーケットや債券、株式ファンドを取り扱うピクテ・ファンズは、130名のスタッフを抱える組織になっています。ピクテ・ファンズは、商品開発、商品管理、販売の3つの側面から成り立ち、これらすべてがピクテ・グループの完成したバリューチェーンを象徴するものでした。1998年4月、ピクテはファミリー・オフィスをヨーロッパで初めて設立した銀行の1つとなりました。このサービスの対象顧客は、資産管理における要望が複雑であり、かつ、巨額の資産を持つ一族です。

1990年代半ばに、外部のマネージャーへの経済関連の情報提供を主な目的とした3人からなるチームが設置されます。運用技術の専門化が進む一方、この職務遂行に対する規制がいつそう厳しくなる中、1999年、ピクテは独立系資産運用会社へのサービスのためのプラットフォームを築き上げました。2005年時点では、260のアセット・マネージャーがピクテと協働し、彼らにより管理されている資産総額は約150億スイスフランにのぼります。



2002年9月、ピクテ・グループの新社屋の建設開始。2006年にジュネーブで働く全従業員が本社ビルに再集結

1989年以降ピクテは機関投資家向けに、経済分析や投資コンサルティングおよび売買執行において、包括的かつテーラーメイドのサービスを提供しています。当初は機関投資家向け仲介サービス（IBS）部門はスイス株式のみの取り扱いでしたが、その後は医薬品や化学製品、食品、銀行や保険会社といった、スイス経済にとって特に重要なセクターの欧州企業の株式も取り扱うようになりました。2002年11月、利益相反を排除するため、ピクテは自己資金の運用者をサポートする調査活動（バイサイド）と外部クライアントにアドバイスをするための調査活動（セルサイド）の間に明確な境界を敷くことを決定、これによりピクテから法的に独立した機関投資家向け証券会社が設立されることになりました。この企業はヘルベア・エス・エイ（Helvea S.A.）で2004年終盤から業務を開始しています。

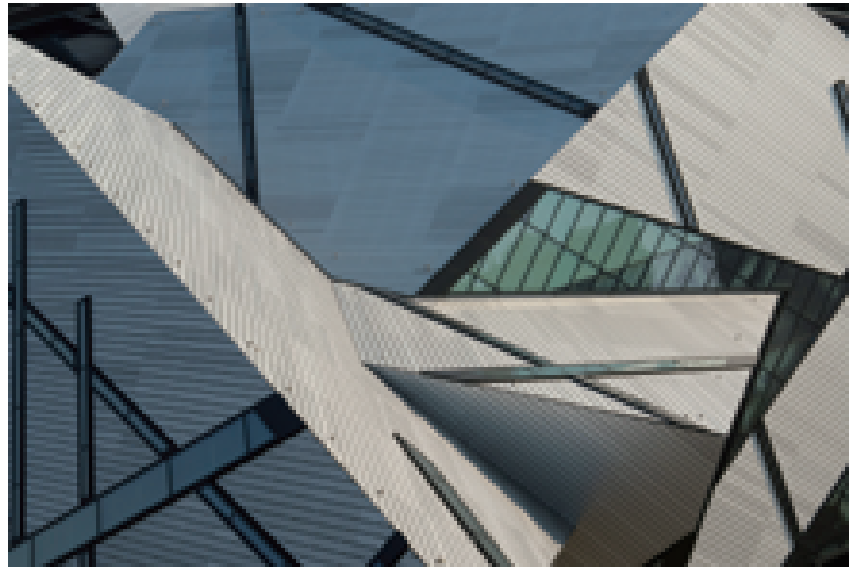
2006年、ピクテ・グループの新社屋がアカシア地区に建設され、ジュネーブで働く全従業員が再び集結しました。

2005-2018

New equity owners and a change in Pictet's legal status

新株主とピクテの法的形態の変更

Since 2005, there have been two important modifications in Pictet's ownership and structure. In 2006, for the first time, Pictet gave a small group of senior executives the opportunity to participate in the equity of the business. At the end of 2017, there were 49 equity owners, including six Managing Partners. Excluding the Managing Partners, Equity Partners represent in number around one percent of total employees of 4,300.



新株主とピクテの法的形態の変更

2005 年以降、ピクテでは経営権と経営体制において重要な変更が 2 度ありました。2006 年、ピクテでは初めてシニア・エグゼクティブに対し株主となるチャンスを与え、2017 年末には 6 名のマネージング・パートナーを含む 49 名の株主が誕生しました。マネージング・パートナー以外のエクイティ・パートナーの数は、4,300 名に上る従業員の約 1 パーセントにあたります。

さらに重要なのは、2014 年 1 月にピクテのスイスの銀行の法的形態を変更したことです。200 年以上に渡り、パートナーシップ制をとってきたピクテ・アンド・シー (Pictet & Cie) は、バンク・ピクテ・アンド・シー・エス・エイ (Banque Pictet & Cie SA) として有限責任会社になりました。株式合資会社ピクテ・アンド・シー・グループ・エス・シー・エイ (Pictet & Cie Group SCA) となり、全てのピクテ・グループ会社が一つになりました。現在のグループの主な会社は、スイスの銀行であるバンク・ピクテ・アンド・シー・エス・エイ (Banque Pictet & Cie SA)、ピクテ・アンド・シー (ヨーロッパ) エス・エイ (Pictet & Cie (Europe) SA)、バンク・ピクテ・アンド・シー (アジア) リミテッド (Bank Pictet & Cie (Asia) Ltd)、そしてピクテ・グループに属する持ち株会社、ピクテ・アセット・マネジメント・ホールディングス・エス・エイ (Pictet Asset Management Holding SA) の下にあるアセット・マネジメント会社になります。

これらの重要な変更は、近年のピクテの成長の中に見ることが出来ます。1980年時点では4カ所のオフィスに約300名のみの社員でしたが、現在では27のオフィスに約4,300名の社員を有し、もはや少数のパートナーだけで全てを管理することは難しくなりました。エクイティ・パートナー制度により、パートナーは意思決定に集中でき、一方でシニア・マネジメント層の意欲を高めました。法的形態の変更はピクテを伝統的な法的形態から脱却させるとともに海外での子会社設立が可能となりました。

個人のパートナーシップ制から、法人への法的形態の変更は、いくつかの意味を持ちます。特に現在ピクテは、バランス・シート、損益計算書やそれ以外の会社情報を公にする必要があります。一方で、事業運営上、個人パートナーは無限責任を負う必要はありません。このように法的形態が変更され、年次報告書は発行しますが、計画的に企業統治を継承してオーナーシップを移行していくピクテ・モデルの主要部に変更はありません。



2005 年以降のビジネス発展

ピクテの創立 200 周年記念後の 10 年は、ウェルス・マネジメント・ビジネスの環境に変化をもたらしました。2009 年 3 月 13 日、経済危機後、スイスが経済協力開発機構（OECD）のモデル租税条約（Model Tax Convention）の 26 項を採択したことにより、国境を越えた個人資産の課税情報が自動的に交換されることとなりました。これは、スイス銀行の秘密主義の終焉を意味します。実際に、ウェルス・マネジメントの透明化が進み、また、海外における、いわゆる「非課税地域」からの撤退を加速させました。

経済危機が引き起こした重大な結末は、アセット・マネジメントとウェルス・マネジメントの双方に、法規制の厳格化をもたらしました。2018 年 1 月 3 日、欧州では投資家保護と手数料などの透明性を重視する第 2 次金融商品市場指令（MiFID II）が導入されました。金融業界は、新しい取引コスト体系や過去のボラティリティに基づいたリスク喚起などを批判しました。しかし、アセット・マネジメント、ウェルス・マネジメントとも、新規制に順応していくでしょう。



2009年から2010年、ピクテは3つのビジネス・ラインを編成し、それぞれのCEOが率いるウェルス・マネジメント (PWM)、アセット・マネジメント (PAM)、アセット・サービス (PAS) としました。これにより、グローバル・カストディとファンド・アドミニストレーションのビジネスは統合されました。トレーディングとセールスは独立したアセット・マネージャーとしてアセット・サービスの傘下に入り、ファミリー・オフィス・サービスおよびオルタナティブ・インベストメント・ソリューション・サービスを提供するピクテ・オルタナティブ・アドバイザー (PAA) はウェルス・マネジメントの傘下に入りました。

2005年以降、ピクテの資産運用ビジネスは急速に発展しました。例えば、2010年には、機関投資家向けの「ピクテ・アセット・マネジメント (PAM)」と「ピクテ・ファンズ (PF)」で知られる投信ビジネスを統合しましたが、この統合により、新ビジネスの資金流入が加速し、運用資産はウェルス・マネジメントと肩を並べるまで成長しました。この成長は主に、1995年にスタートしたバイオテクノロジー・ファンドなどのテーマ型ファンド、新興国債券、トータル・リターン・ファンドやヘッジ・ファンドの拡大によるものです。特に、日本とイタリアにおけるビジネスは、2005年以降、目覚ましい成長をみせました。

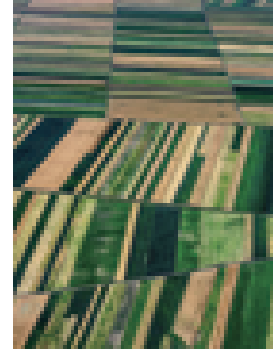
近年の最重要 IT プロジェクトは、「アバロク (Avaloq)」と呼ばれる世界共通の銀行サービスの総合システムの導入でした。2018年はピクテの戦略的デジタル革命の年となり、グループ内のデジタルに関するすべての戦略を統括し推し進めるチーフ・デジタル・オフィサーが任命されました。



責任感のある思考と行動に

「サステナビリティ（持続可能性）」はピクテの理念の中核をなしています。長期に渡りお客様の資産保全に努めてきましたが、それは、将来世代の利益を守ることで実現することだと考えます。ピクテは会社の運営から、お客様に代わり行う投資に至るまで、私たちが行う事業活動がもたらす環境への影響に配慮しており、いくつかの取り組みを行っていますが、その中で、2020年までにピクテ・グループ全体の社員一人当たり二酸化炭素排出量を減らすことに厳しい目標を課しています。2006年に建設された本社ビルは、環境への影響を最小限にするよう設計されています。

ピクテはサステナブル投資戦略を他社に先駆け開発してきました。2000年には、業界初かつ今日ではセクターファンドの中でも最大規模となった「ウォーター・ファンド」を立ち上げました。2008年には「ティンバー（森林資源）・ファンド」を立ち上げ、この分野でもパイオニアとなりました。ピクテ・グループの「サステナビリティ委員会」は、グループ内の活動における環境への影響を測り、また、アセット・マネジメント、ウェルス・マネジメントにおけるサステナブル投資を推奨しています。ピクテ・アセット・マネジメント（PAM）では、全ての投資判断において環境・社会・ガバナンス（ESG）の項目を組み込んでいます。ピクテ・ウェルス・マネジメント（PWM）では、顧客へのサービス提供におけるサステナビリティ基準を導入しています。



より広範には、ピクテは宗教改革の精神に根付いた慈善事業を伝統とし、長年の間、ピクテの歴代のパートナー達は、医学研究、文化、社会的、人道的な分野へ積極的に貢献してきました。2009年にはピクテ・グループの慈善事業活動の枠組みとなる、「ピクテ・グループ慈善事業基金 (Impact)」を設立しています。

2008年にピクテ・グループのパートナーは、写真を通じて世界のサステナビリティに対する意識を高め、問題解決への行動を促すことを目的とし、国際写真賞「プリ・ピクテ (Prix Pictet)」を設立しました。2018年にプリ・ピクテは10周年を迎えますが、写真界において最も権威ある賞の一つとなっています。プリ・ピクテは設立以来7つの環境問題をテーマとし「Water (水)」に始まり、「Earth (地球)」「Growth(成長)」「Power(権力)」「Consumption(消費)」「Disorder(無秩序)」「Space(空間)」と続いています。現在は2年毎に授賞式を行い、これまでにプリ・ピクテの写真展は、75を超える博物館や世界の名だたる美術館で行われています。

結局のところ、社員の協力なしでは何一つ成し遂げることはできません。お客様に対しての責任感、社員相互の責任感、投資活動に対する責任感、そして私達が日々働き生活をするより広い世界に対する責任感を高めるためにも、社員一人ひとりの幸福が必要と考えます。

社名の変遷

1805-1807	De Candolle, Mallet & Cie
1807-1812	De Candolle, Turrettini & Cie
1812-1819	J. de Candolle & Cie
1819-1841	De Candolle, Turrettini & Cie
1841-1848	Turrettini, Pictet & Cie
1848-1856	Edouard Pictet
1856-1878	Edouard Pictet & Cie
1878-1909	Ernest Pictet & Cie
1909-1926	G. Pictet & Cie
1926-2013	Pictet & Cie
since 2014	Pictet & Cie Group SCA

本店所在地の変遷

1805-1819	3, cour St-Pierre
1819-1856	26, rue de la Cité, actuellement 18
1856-1878	8, Corrairie, actuellement 12
1878-1909	12, rue Petitot
1909-1926	10, rue Diday
1926-1975	6, rue Diday
1975-2006	29, bd Georges-Favon
from 2006	60, route des Acacias



2006年完成のピクテの新社屋

ピクテ 200 年の歴史、42 名のパートナー

Jacob-M.-F. de Candolle	1805 to 1841
Jacques-Henry Mallet	1805 to 1807
Charles Turrettini-Necker	1819 to 1848
François Girard	1821 to 1843
Edouard Pictet-Prévoist	1841 to 1878
Alphonse Turrettini	1841 to 1843
Ernest Pictet	1856 to 1909
Emile Pictet	1875 to 1909
Guillaume Pictet	1889 to 1926
Jaques Marion	1909 to 1930
Gustave Dunant	1914 to 1933
Aymon Pictet	1919 to 1928
Charles Gautier	1919 to 1948
Pierre Lombard	1927 to 1954
Albert Pictet	1928 to 1955
Alexandre van Berchem	1930 to 1965
François de Candolle	1937 to 1942
Jean-Pierre Demole	1945 to 1975
Victor Gautier	1948 to 1960
Edouard Pictet	1950 to 1975
Jean-Jacques Gautier	1955 to 1973
Michel Pictet	1955 to 1980
Edmond Boissonnas	1956 to 1965
Claude de Saussure	1959 to 1986
Denis de Marignac	1963 to 1987
Pierre Pictet	1963 to 1988
Guy Demole	1967 to 1996
Pierre Lardy	1975 to 1995
Charles Pictet	1979 to 2005

Ivan Pictet	1982 to 2010
Claude Demole	1982 to 2008
Jacques de Saussure	1987 to 2016
Nicolas Pictet	since 1991
Philippe Bertherat	1995 to 2014
Fabien Pictet	1996 to 1997
Jean-François Demole	1998 to 2015
Renaud de Planta	since 1998
Rémy Best	since 2003
Marc Pictet	since 2011
Bertrand Demole	since 2011
Laurent Ramsey	since 2016
Boris Collardi	since 2018

参考文献

Echoes, Pictet & Cie.

200 years of history: one bank and the men who built it, Pictet & Cie

Alfred Dufour, Histoire de Genève, Que sais-je ?

René Guerdan, Histoire de Genève, Mazarine.

Paul Bairoch, Victoires et déboires, volume 2, Histoire économique

et sociale du monde du XVIe siècle à nos jours, Gallimard 1997.

Page 8 : The Pâquis "iron wire" suspension bridge in Geneva, © A. et G. Zimmermann Geneva.

Page 11: Cornavin main railway station in Geneva, platform for trains leaving for France around 1906. Postcard Genève,

© Centre d' iconographie genevoise.

Page 17: Louis GEORGE (1831-1899), Genève, vue prise au-dessus de la Plaine de Plainpalais, © Centre

d' iconographie genevoise, coll. icon. BPU.

Page 23: UN Library (Geneva), League of Nations photographic Archive

Page 27: Oscar SARTORI (1894-?), View of the Quai du Mont-Blanc and of the Old Town,

© Centre d' iconographie genevoise, coll. Vieux-Genève. Page 29 : Team Swiss Ships (www.swiss-ships.ch)

Page 31: Geneva, Bd. Georges-Favon no 27-29, August 1969 © Centre d' iconographie genevoise, coll. Vieux-Genève.

Concept, writing, design and production: Bontron & Co, Geneva, Switzerland

Printed in Switzerland by Entreprise d' arts graphiques Jean Genoud SA, Le Mont-sur-Lausanne

www.pictet.co.jp